

「アメリカ」の原像

——『森本あんり著『アメリカ的理念の身体』を読む——

古 矢 旬

今日のアメリカ合衆国にあたる土地の歴史を、一七世紀初頭にまで遡って行くならば、行けば行くほどそこで出会う人々のうちに占める先住インディアン比率は増え、かぎりなく一〇パーセントに近づいて行くであろうし、逆に先住民を除く人々の比率はかぎりなくゼロに向かって減って行くであろう。しかし、それから少なくなつてゆく非先住民のうちに占めるヨーロッパ生まれ人口比率は、これもかぎりなく一〇パーセントに近くなるであろう。この人口統計的な当たり前の事実が物語るのは、ようするに一七世紀初頭のアメリカ史は、先住インディアンときわめて限られた数のヨーロッパ人との出会いの場にはかならなかつたということである。そこにはわれわれの知る「アメリカ人」も「アメリカ社会」もまだ存在していない。森本あんり著『アメリカ的理念の身体』は、当時の北アメリカ大陸、とりわけそのニューイングランドと呼ばれた地方における、この当たり前の人口学的事実を起点とし、宗教と世俗政治の関連をとおして、「アメリカ」が形成され

立ち上がってくる過程を浮かび上がらせる。ここにいう理念とは、少数のヨーロッパ人（多くはイギリス人）たちが、旧世界から持ち込み、新世界の状況に合わせて変更を加えた、政教関係をめぐるさまざまな思想やアイデアを指す。そして、ここにいう身体とは、それらの思想やアイデアが交錯し、競合する過程でしだいに作り上げられていった具体的な社会関係や制度や法を指している。本書における両者の関係を見つめる著者の視点は、「理念はここに身体を纏う」（二二頁）や「アメリカ的な理念の受肉形態を問う」（二六〇頁）といういかにも神学者らしい表現が象徴するように、具体的な物質生活に対する理念の規制力を重視する。その点で、本書は、ともすれば初期イギリス植民地の物質生活の困難が思想や理念の選択を規定した面を強調しがちな、いわば決定論的な植民地時代史と隔たること大きい（*）。

名著『ジョンサン・エドワーズ研究』で知られる著者は、本書において、分析対象をエドワーズの生きた時代の前後に大きく広げるととも

に、傑出した宗教思想家をめぐる精細な神学思想史から、より広くキリスト教をめぐる聖俗の統治構造の形成史・展開史へと研究の焦点を移している。その結果、本書はきわめて専門性の高い宗教史研究であると同時に、植民地時代のヨーロッパ人が作り上げた政治社会の理念的基盤をつまびらかにするという点では優れて「アメリカ研究」としての性格を帯びることとなった。

よく知られているようにニューイングランドにおけるイギリス植民地建設は、それに十数年先行したヴァージニアの場合とは異なり、イギリス国教会批判派のピューリタンの主導下に建設された。一六二〇年の分離派ピューリタンによるプリマス入植、ついで一六三〇年の非分離派ピューリタンによるマサチューセッツへの入植である。しかし、その後の二〇年間、三千マイルの大洋を隔てたこの地に居住するヨーロッパ人の人口は、せいぜい一万数千にすぎなかつた。こうしたわずかの人口の大多数は当然のことながらヨーロッパ生まれであり、成人の多くはヨーロッパ（とりわけイギリス）の伝統的な習俗の内に育った人びとであつた。その意味で、ニューイングランドは、文字通りもう一つのイギリスとして、あるいはヨーロッパの延長として以外には、始まりのような社会であつたといえよう。

従来、アメリカについては、しばしばその新しさが、そしてアメリカにやってきた移民たちについては、しばしば彼らの未来志向的な新規

まき直しの動機が強調されがちであったけれども、すくなくとも一七世紀初頭においては、いかにかの荒野で生き抜き、いかに腐敗したヨーロッパで失われてしまった良きヨーロッパ的生活様式を再現し、保守し、継続してゆくかという問題こそが、彼らにとつて最大の関心事であつたにちがいない。そして当初、そのために利用可能なノウ・ハウは、あけてヨーロッパの経験に由来していたのである。それ以外には、ほとんど徒手空拳の少数の宗教指導者にして世俗政治の指導者たちが、未知の空間に生存の機会を求めつつ、可能な限り理想的な信仰共同体を構築すべく、いかに思考し、いかに行動し、いかに戦つたかを問う本書の問題設定は、まさにスリリングである。

本書によれば、この時期、ニューイングランドに渡来したイギリス人——とりわけピューリタン——が直面した課題は、「政治の制度と宗教の制度とを同時に作り上げること」（一六頁）であつた。いうまでもなく、この課題はキリスト教史において、全く新しかったわけではない。それどころか、神の統治と世俗の統治とをどのように弁別し、関連づけるかという問題は、宗教改革以後の聖俗両権の争闘と妥協、中世における教皇権と皇帝権との長い角逐の歴史、さらに遡つてそもそもイエスの「カエサルのはものはカエサルに、神のものは神に返しなさい」という言葉自体が示すように、古来キリスト教の根本問題の一つであつた。一七世紀ニューイングランドにおける政治と宗教の制度

構築にまつわる問題を、寛容論と良心論、政教分離論、信教の自由論といった三つの側面に大別し、それらを長いヨーロッパ・キリスト教史の脈絡において考察するところに、「アメリカ研究」としての本書の画期的意義が潜んでいるといつてよい。アメリカ宗教における寛容問題も、内面（良心）の自由論も、植民地時代の最初期においては、ヨーロッパの中世から宗教改革時期にはぐくまれてきた寛容論（一つの優越的宗教集団が、平和のために決してながら少数者集団の存在を許した）、良心論（良心は時に過ちを犯す、良心に従つてなされる愚行を社会はどこまで許せるか）に淵源をもつていたことを、著者は実証的に克明にあきらかにしている。そこには近代の曙光がまだ見えぬ時点における、「アメリカ」の立ち上がり瞬間が、鮮明に描きだされているといつてよい。

この点で著者に独特の方法を例示すべく、試みに「政教分離」原則をめぐる著者の論旨の展開を辿つてみよう。従来、アメリカ合衆国はその憲法修正第一条によつて、政教分離を実現したとしばしばいわれてきた。しかし、「これによつて自由な国家の下に自由な教会が花開いた」とする楽観的な（あるいはアメリカ例外論的な）結論を、著者は十分な歴史学的検証を経る以前の「標準理論」として退ける。しかし、同時に著者は、アメリカにおいてほぼ完全な「教会職と政治職の分離」が実行され維持されてきた理由を、「反教権主義」やカトリック移民の増加に対するネイティブイズムの亢進に求める

（ややしニカルな）「修正主義」的解釈にも肯んじない。著者によればいずれの解釈も、政教分離原則の歴史的起源に十分に踏み込んでいない。

こうした批判から著者は、ニューイングランドのピューリタン植民地が入植当初より教会職と政治職の分離を図つていた事実に着目し、その理由をカルヴァンの「聖俗両権分離論」に見出して行く。結論だけをみるならば現代的な政教分離と似通つた面もあるカルヴァンの分離論を精査して著者はいう。カルヴァンにおいては、「永遠の生命にかかわる支配」を旨とする「牧師職」と「たんに市民的正義を規制するだけ」の「政治職」（二五一頁）とは、全く異なつた原理に立つ「つとめ」として厳格に区別され、両方の兼職は許されていない。しかし「政治職」は、「神の真理の冒瀆」を世俗権力によつて取り締まる義務をも負っており、その限りでは「牧師職」と神の意志の実現という究極の目的を同じくしている。そして、このカルヴァンの「聖俗両権分離論」は、やがてニューイングランドのピューリタンが踏襲し、実施するところとなる。この分離論が、国家の首長と教会の首長を国王が兼ねる英国国教会体制下では、きわめて危険な体制批判の契機を含んでいたことは否定できず、著者はそのような分離が可能であつた一因として、本国の統制に対する「大西洋という距離的緩衝材」（二五八頁）を挙げている。しかし、同時に著者が強調するのは、ロジャー・ウィリアムズやアン・ハチンソンらの宗教的過

激派に当たった際のマサチューセッツにおける聖俗両権の相互協力の実態である。そこに着目するならば、その政教分離が、信仰共同体としてのコモンウェルスをいかに調和的に秩序立てて維持してゆくかというカルヴァンの課題に主眼を据えていたことが、あきらかになる。それは、信教の自由の保障を主目的とする連邦憲法修正第一条が謳う政教分離原則とは、明白に異なった原則に立脚していたのである。

もとより一般に公定教会制の下では、宗教的多元性を入れる余地がなく、世俗権力は信教の自由を保障しない。のみならず世俗権力への参画は、公定教会の信徒に限って許される。マサチューセッツのピューリタンたちは、ヴァージニア植民地のサクラメンタルで本国体制に忠実な英国国教会制とは異なり、自ら会衆派と呼ぶ改革派の教会を公定教会とし、その教会の成員すなわち牧師と「聖徒」(the elect) のみに市民総会への参加権を付与した。一説によれば、一六四三年におけるマサチューセッツの総人口約一万五千人のうち、市民はわずか一七〇八人にすぎなかったという (Owen Chadwick, *The Reformation* (Middlesex, Eng: Penguin Books, 1972), 209)。すべての人間は創造主により平等に創られたと謳う後のアメリカ独立宣言には、およそそぐわないこの寡頭的な聖俗の統治制度も、著者によればやはり、近代以前の身分制社会の平等観——人々は「神の前で霊的には平等だが、社会的現実では不平等なのが当然である」(七一頁)——に基づくものにほかならない。

ここでも、アメリカの出発点は中世である。

本書をとおして得られる印象では、ニューイングランドのピューリタンも、程度の差こそあれ、本国に残ったピューリタンや大陸の改革派やユグノーと同じく、聖俗両権を把握することではじめて信仰を守ることができるという伝統的論議の枠の中で、自己保存を追求した集団にほかならなかった。しかし、本書は、アメリカの初期社会がいかに中世的伝統に拘束されていたかの考察に終わるわけではない。この伝統の突破なくして「アメリカ」は立ち上がらないからである。

カトリシズムと教皇権の最盛期、ローマはキリスト教信仰の要として全ヨーロッパを制圧していた。このヨーロッパ大の信仰共同体の内側で、あらゆる世俗権力は教皇権の前にひれ伏し、従属を余儀なくされていた。世俗権力が、その地位を脱し、宗教権力と張り合うようになるのは、世俗権力が独立的な地域支配を主権的王国として確立し、ルネサンスと宗教改革を経て、カトリック世界が四分五裂の状況に陥って以後のことである。プロテスタント諸派は国教会や公定教会制度の下に、聖俗両権を掌握し、やがて市民の秩序が教会の軛から自由になり、逆に教会は市民社会の内側に構成された一つの任意団体 (voluntary association) とみなされるようになっていった。

こうした聖俗の歴史的な逆転現象は、ニューイングランド社会でもほぼ相的に繰り返されたといつてよいであろう。ニューイングランド

のピューリタン社会においてこの逆転現象の口火を切った一人が、本書の主人公とも目すべきロジャー・ウィリアムズである。ウィリアムズこそは、公定教会制による単一教派の信仰共同体を維持する目的からではなく、植民地に不可逆的に進行する教派的多元化の現実を受け入れ、すべての植民地人に信教の自由と市民の権利を保障する目的から、政教分離論を主張したイギリス植民地最初の宗教指導者であった。このウィリアムズのパセティックな遍歴とその死後現在に至るまで揺れ動き続けてきたウィリアムズ評価の変遷を辿る二章は、評伝としてもアメリカ研究としても精彩を放つ本書中の白眉といつてよい。

とはいえ、ここでも著者の筆は厳しく大団円を避けている。晩年のウィリアムズは、ロードアイランドという「みずから建設の礎を置いた政治組織が、彼自身の掲げた信教の自由という理念によって浸食され、瓦解しかねない状況」(二二八頁)に直面する。「放埒でわがまま放題な人々」に悩まされたウィリアムズもまた、彼を追放した側のウィンスロップと同じく、「政治権力からの自由」を求めて出発しながら、「政治権力への〔参画の〕自由」を拡大したことによって、否応なしに政治的求心力の危機に直面したのであった。「人類は何らかの統治組織 (Government) なしには共に生きてゆくことができない」というウィリアムズ死の直前のことばは、彼が過激に求め続けた信教の自由という理念が、秩序だった「身体を纏う」ことの困難

を吐露するものであったといえるのかもしれない。そしてこの困難な課題を残したことによって、後世のウィリアム評価も大きく揺れ動いてきたのであった。

かくして、アメリカにおける政治の制度と宗教の制度の関わりを、アメリカ・キリスト教の始原に遡って解き明かすことをめざした本書は、未決の「ウィリアムズ問題」を提示することによって、なおあるべき政教関係を現代に問い掛けることで終わっている。

本書のような、専門的見地から考え抜かれた精密な論考に対する門外漢の問題提起や批判は、多くの場合望蜀の嘆に陥らざるをえない。しかし、あえてそれを恐れず最後に、一点だけ本書への疑問を提示することで、稿を閉じることにしたい。

ことは、著者のいう「標準理論」に関わる。本書の主眼は、ニューイングランドのピューリタニズムの政教関係の起源が深くヨーロッパ中世に求められることの発見に注がれている。ここでは、連邦憲法修正第一条による近代的な政教分離原則と、その制定後も続いたニューイングランドの公定教会制との齟齬が繰り返し指摘されている。連邦憲法の政教分離原則に流れ込む思想的な源流として、本書が挙げるのは、この公定教会制の中から噴出したウィリアムズのような異端的過激派にとどまっている。そこでおそらく残る問題は、寛容をめぐる別の思想潮流と修正第一条との関係になる。近代以前の寛容思想として、エラスムスから啓蒙に

たる流れは、本書にいう中世的寛容論とどう関わるのか、その流れは後のアメリカの政教分離原則とは無縁なのだろうか。その点で、注目されるのはやはり南部イギリス植民地の国教会制度の変容である。一七世紀、ピューリタンが忌避したウィリアム・ロード支配下の英国国教会に徹底して付き従っていたヴァージニアの国教会は、その後いかに変容したのだろうか。そのように問う理由は、まさにこの国教会の牙城であったはずの植民地から、ジェファソンとマディソンが登場してくるからである。彼らアメリカ啓蒙の担い手たちが、どのような思想遍歴を通して、理論的立場にいたり、ニューイングランドのピューリタンには実践不能であった政教分離原則に到達したのか。あるいは、本書の著者を含む専門家には、解決済みの陳腐な疑問かもしれないことを恐れつつ、一つの問題提起としたい。

* これに関し、本書の思想的立場は、一九世紀のフィリピンの抵抗運動の「思想」と「行動」について提示されたレイナルド・イレートの解釈枠組みと、西欧の学術を十分に咀嚼しながらなお独自の批判的視点を維持する点で通底しているように評者には思える。イレートは言う。「この時期のフィリピンの」農村生活の状態は、大衆の行動様式に大いに影響を及ぼした。しかし、その関係は決定論的でもないし、彼らの文化（すなわち「上部構造」）が物質的生活に対してある程度の自律性を欠いていたわけでもない。……初期の反乱において、しばしば狂信的、非合理的、さらには「封建的」とさえみなされるある種の行動様式とは、理想的な社会形態と行

動様式にもとづいて農民が世界を再構成しようとする企てであった、と解釈することができるのである。」（レイナルド・イレート（川田牧人他訳）『キリスト受難詩と革命』一八四〇―一九一〇年のフィリピン民衆運動』（法政大学出版局、二〇〇五年）、一七頁）。これらフィリピンの農民たちと、本書のニューイングランドのピューリタンたちの思想―行動様式の類似性は、評者には明白にみえるのであるが、いかがであらうか。

（ふるや・じゅん 北海道大学教授／アメリカ史）

2012年12月刊

森本 あんり 著

アメリカ的理念の身体

寛容と良心・政教分離・信教の自由をめぐる歴史的実験の軌跡

寛容論と良心論 中世的寛容論から見た初期アメリカ社会の政治と宗教 誤れる良心と愚行権 誤れる良心と偽れる良心をどう扱うか 人はなぜ平等なのか **政教分離論** 初期アメリカ社会における政教分離論の変容と成熟 ロジャー・ウィリアムズの孤独 さまよえる闘士 教会職と政治職 **信教の自由論** プロテスタント的な大学理念の創設 ジョナサン・エドワーズと大覚醒の研究史 反知性主義の伝統と大衆リヴァイヴァリズム キリスト教の女性化と二〇世紀的反動としての男性化

A5判・366頁・5,200円 / ISBN 978-4-423-17153-0